

# 夭折した君に



「19年か」早いものである。残雪が多い今年の一ノ倉沢は簡単にテール・リッジ下まで登れた。霧は相変わらず灰色の岩壁にまとわりつき衝立岩は半分しか見えなかった。あの日もこんな日だった。川口智也（もとや）君（当時21歳）は19年前の81年6月27日、ここで遭難死した。

「お父さ〜ん、大変」その日の夕方散歩に出掛けた私の所に女房がつかかけを走らせて来た。川口君が谷川岳で遭難した

らしいと言う。「何にィ」頭は真っ白になった。当時三島の寿町にあった事務所に緊急招集が掛けられた。しかし、川口君は即死の状態ですでに遺体は降ろされたという。遭難で一番大変な遺体の搬出の必要はもうなかった。ひょっとしたらの淡い期待は見事に打ち砕かれた。M、T、S、と私を乗せた車は関越道を急いだ。闇に向かい何度も「何故だ、何故なんだ」と問うても所詮は虚しい響きだった。

登山センターに到着すると遺体は入り口の軒下のコンクリートの上にシュラフにつつまれ横たわっていた。遭難は動かない事実だった。顔には傷もなく静かな表情だった。血の気がなく白っぽいことを除けば今にも「後藤さん、そんな所で何しているんですか？」と、はにかみながら起きてきそうな錯覚をした。

翌日、水上で茶毘（だび）された。骨の中に前年12月樹池でスキー練習中に骨折した際治療した金属片が光っていた。彼はその骨折後最初の大きな山が今回の一ノ倉沢烏帽子岩だった。遭難の直接原因は懸垂下降の際ザイルの末端が不揃いだった。途中まで懸垂してエイト環が抜け烏帽子スラブに墜落した。余りにも早すぎる死であった。

若い人が好きだった私は登山時代彼と一番山に登った。聖岳東尾根、小川谷、鳳凰シレイ沢、吉田大沢、北岳バットレス・・・。安全登山も随分教えたつもりだったが、大学の山岳部の活動の中で骨折のブランクが焦りを生んだかもしれない。残念だった。ただ、ただ残念だった。若い人は山で逝ってはいけない。若い人を山で逝かしてはいけない。それは我々の務めでもある。

【NO-59 00-06-27】